目白大学　人文学研究
第７号　2011年　185－199

共創型対話における浮遊型思索と響感・推察力の意義
―21世紀の人間形成と対話―

Suspensive Contemplation and Empathetic & Inferential Abilities in Inventive Dialogue:
Humanity Building and Dialogue in the 21st Century

多田　孝志
Takashi TADA

Abstract

Dialogue plays a great role in humanity building in multi-cultural societies in the 21st century. Dialogue can be classified into four main categories: truth inquiry, correspondence, instruction and invention.

Inventive dialogue is the most effective in a multi-cultural society.

Suspensive contemplation is rumination during meditation, silence, and isolation.

The process of chaos and conflict during suspensive contemplation leads to the emergence of something new.

Empathizing with and inferring others' thoughts and feelings enriches suspensive contemplation and enhances inventive dialogue.

Suspensive contemplation and activities conducted to enhance empathetic and inferential abilities help personal transformation and self-supporting growth, which leads to human growth.

Key Words：multi-cultural society, inventive dialogue, suspensive contemplation, empathetic & inferential abilities, personal transformation & self-supporting growth

キーワード：多文化共生社会、共創型対話、浮遊型思索、響感・イメージ力、自己変革・自己成長

ただたかし：人間学部児童教育学科教授

1　多文化共生社会における共創型対話とは

対話の機能は自分の考えや感想、情報などを「伝える・知らせる」ことにある。しかし、対話の機能は、それだけにとどまらない。対話とは「意志や感情の伝え合い」であり、「人と人とのかかわりづくり」でもある。この対話の「意思や感情の伝え合い」の機能は、説明、説得、納得、共感などの行為となる。さらに「人と人とのかかわりづくり」の機能により、相互理解、相互啓発、相互扶助が生起し、創造的・発展的な関係が構築できていく。したがって、対話力を高めていくことは、人間関係形成力の育成にもつながっていく(1)。

（1）　対話に関わる先行研究

我が国の対話研究は主として国語教育を中心に行われてきた。その国語教育は伝統的に読解・記述を重視する傾向があったが、先行研究を概観すると対話の重要性に関する指摘も散見できる。その主な言説を引用してみよう。

澤柳政太郎は「国語教授といえば、読み方や書き方や綴り方にのみに没頭していたのは、間違ったことである。―中略―　児童本位に立脚し、自然の性能に基づいて教育を施すということからいえば、聴くこと話すことを軽視したのは、間違いといわねばならぬ」と述べ(2)、倉沢栄吉は「はなしことばの社会化、領域の拡大によって、私どもは今までのはなしことばに対する観念を改めねばならない。すなわち文字によって表わされたものが高くて、はなしことばによって表現されたものが低いという考えである」と記し(3)、唐沢富太郎は「過去の国語教育では、主に過去の文化遺産を継承して伝達するという点が重視されていたから、どうしても、日常の社会生活で使用する言語について教えるよりも、過去の文化的遺産である文学的なるものが教えられた。しかし、それでは、新しい文化を創造して行く基礎としての国語教育という役割が極めて小さなものになってしまう」と指摘している(4)。

対話を活用した学習方法に関する研究は、西尾実、倉沢栄吉、田近洵一、村松賢一、有元秀文、藤森裕治等の主として国語教育の研究者たちにより推進されてきた。また斉藤美津子は我が国のコミュニケーション論の先駆的な研究者であった（『話し言葉の科学　コミュニケーションの基礎理論』，サイマル出版会，1968参照）。

1990年代後半に入り、異文化間教育や、グローバル教育、国際理解教育の視点から、地球時代、多文化共生社会の到来を視野に入れた対話研究がなされるようになった。山岸みどり「異文化間リテラシーと異文化間能力」（異文化間教育学会紀要『異文化間教育』11，1997）、佐々木文による「かかわりと対話という身体的アプローチ」（博士論文『国際理解教育の基礎理論の検討及びその結果を適用した初等教育における教材開発に関する研究』2002）の論述、吉村巧太郎による「グローバル社会における市民的資質」（日本グローバル教育学会紀要『グローバル教育』8，2005）としての対話に関する言説、鹿野敬文の「グローバル社会にふさわしい２つの対話力育成方法」（『グローバル教育』9，2006）、横田和子「ことばの豊穣性と国際理解教育」，日本国際理解教育学会紀要『国際理解教育』，VOL14，2008）などの研究がある。

（２） 人間形成と対話

人が他者や事象などさまざまなものとの関わりの中で生きていることは、先達の説くところである。釈尊は、ウネーランジャラー河のほとり、菩提樹の下で結跏趺坐し、解脱（さとり）の喜びを受けたとされる。「すべての存在は関係性の中にある（直観）」「人間は一人では生きられない」とは釈尊の悟りの境地であった（『釈尊のさとり』，講談社，1979）。マルティン・ハイデッガーは人間が生存するために必要な条件について「他人なしの独立した自我などない」（『存在と時間』，筑摩書房，2000）と記し、Ｊ．デューイは「学校の第一の仕事は協同的・相互扶助的な生活の仕方について子どもたちを訓練し、彼らの中に相互依存の意識をやしなうこと・・」（『学校と社会』，岩波書店，1957）と述べている。パウロ・フレイレは、「対話とは出合いであり、対話者同士の省察と行動がそこでひとつに結びついて、世界の変革に向かうもの」であり、「創造的行為」であるとし、「対話」の条件としては「愛」「謙虚さ」「信頼」「信用」「希望」「批判的思考」の６つを上げている。（『被抑圧者の教育学』，亜紀書房，1979）

対話に関する、多様な言説の中でも、本論考のテーマである浮遊型思索、響感・イメージ力、さらには人間成長に関わって、殊に多くの示唆をうけるのは、Ｏ．Ｆ．ボルノーとマルティン・ブーバーの二人の思想家である。

ボルノーは、「（会話とは）「機智に富む」ものでなくてはなりません。それは軽やかに、また優雅に流れてゆかなくてはならず、いっさいのより深い問いはただ仄めかしに留まるのです。―中略―いっさいのことは洗練された（上品な）表面にとどまるのです」と会話の特質を述べ、さらに、対話の本質について「真の対話においては、人間をその最内奥において動かすものが話題になるのです。真の対話のなかで真の内省の問いが口を開くのです。それゆえ、困難になると容易に一つの問題から他の問題へと移行することによって、問題を巧みにかわすことは許されません。真の対話は、その対象に頑として留まらなくてはなりません。それは真剣に、また頑強に、問いが投げかける疑わしさを耐え、こうしてその深部に迫るのでなくてはなりません」と記している[(5)]。

ブーバーの見解をみてみよう。ブーバーは「『対話』は、言葉を失う沈黙にあってその深みから聴こえてくる言葉に耳をすませて待ち望み、それに応答するところからはじまる」と述べ、「対話しているかのようにみえる饒舌な二人が、実は独白を交換しているだけだということがよくある。結局のところ、自分のなかですでに出来上がった物語を交互に語っているだけで、関心があるのは自分であって相手ではなく、自分を語るために相手に向かって（しかし実は自分自身に向かって）語っている」と喝破する 。ブーバーはこのような「対話的に偽装されている独白」をする者を、「鏡の前の独白者 Spiegel-Monologist」と呼ぶ。さらに「対話する二人の人間の、いずれか一方でも、また両方でもない。語られる言葉は、むしろ私が〈間 Zwischen〉と名づける、個人と個人との間の波打ち振動する場に生起する。その〈間〉は、そこに関わる両方の人物には決して還元できない場である」と記す[(7)]。

ボルノーの「真の対話のなかで真の内省の問い」の指摘、ブーバーの「対話的に偽装されている独白」、沈黙・間への言及は、人間形成に深く関与する「浮遊型思索」「響感・イメージ力」の考察への示唆を与えてくれた。

（3） 共創型対話の概念

筆者は、対話を、指示伝達型、真理探究型、対応型、共創型の４つに分類している。指示伝達型とは、上司から部下への上意下達のように、上下関係の対話であり、指示内容の正確さが重要となる。真理探究型とは、「生きるとは何か」といった真理を希求する対話の方法である。対応型とは商取引や国際交渉に典型的にみられるように、自利益追求を基調に妥協点を目指した対話のあり方である。それでは共創型対話とはどのようなものであろう。

共創型対話とは文字通り、参加者が協力して、より良い結果を希求していき、その過程で創造的な関係が構築できる対話である。対話は、会話における、自由奔放な発言とは異なり、目的を持った話し合いである。分かり合えないかも知れない同士が、互いに意見や感想をなんとか伝えようとするための相互行為である。こうした相互行為の継続により、一人では到達し得なかった高みに至ることに対話の目的がある。この多様な人々が英知を出し合い、共に新たな知的世界に至ることを重視し、発展させたのが共創型対話である。

『僧侶と哲学者』は、西洋哲学者である父ジャン＝フランソワ・ルヴェルとチベット僧となった息子マチウ・リカールとが、人生の意味、仏教の神髄等についての縦横無尽の議論を掲載した書である。この対話の中で、ルヴェルは「他者との関係が、摩擦と不和しかもたらさない自己中心主義から作られることがないようにするには、それぞれの人が自分の人生に意味を与え、内面の開花を実現できるようにする必要があります。こうした精神の変革のプロセスは、自分がこれから伸ばしていく長所が他者をいっそう助けるのに役立つのだと考えることで、つねに進めていかねばなりません」と述べているが[(8)]、この見解は共創型対話の基本理念と軌を一にする。

共創型対話の基本理念は、和の精神や相互扶助を基調とする「多様性の容認と尊重」にある。価値観や文化的背景が違う人々と、心の襞までの共感や、完全な理解をすることは不可能であるかもしれない。しかし、互いに、英知を出し合い語り合えば、むしろ異質なものの出会いによってこそ新たな世界が拓かれる、共創型対話はこうした考えに立っている[(9)]。

（4） 共創型対話における浮遊型思索、響感・イメージ力の関わり

自己と異なる価値観・思惟方式・行動様式をもつ人々とともに、対立や摩擦を乗り越え21世紀の市民社会を構築するためには、一方的表象による他者認識、同化・差別・排除の構造、一元化された多文化認識、相互理解の難しい他者の回避を打破し、むしろ他者の眼差しを生かし、多様な視野、複眼的思考をもつことが必須である。

相互理解の難しい他者との対話についても、自己の芯はしっかりもちつつ、相手が伝えたいことの本質を把握するため、多様な角度からの検討、相手の立場の推察などが、少しでも理解

を深め、またその姿勢が相互信頼を醸成していく。

多様な角度からの検討、相手の立場の推察などは、即時的にはできない。思いを巡らし、推察していくための「時」が必要であり、また微妙な言動にも相手の伝えたいことを感知する力を高めておくことが大切となる。浮遊型思索、響感・イメージ力を、多文化共生社会における共創型対話を充実させる基盤と位置づける所以である。

浮遊型思索の時間の保障、響感・イメージ力の育成は、ニヒリズム・シニズムに傾き、自己肯定感がもてず、過剰に他者の目を意識し、対人関係に苦手意識をもつ日本の青少年に、他者とともに前向きに生きる力を高めることにもつながると信じる。

２　浮遊型思索の時間

思索とは、自分に向かって問いかけること、自分の内部にあるものを掘り起こし、自分の中の貴重なもの、美しいものを掘りあてることだ。また思索は他者が伝えてくるものを受け止め、消化し、自分のものにし、再組織する行為でもある。

（1）　浮遊型思索とは

思索の原点である問いには、「知識・情報を求める問い」と「内省的な問い」があろう。前者により、自分の知識・情報を拡大することができ、自己の知的世界を拡張するという可能性を獲得する。後者により、自己を振り返り、思考を深め、視野を広め、自己変革・成長させていくことができるのである。「知識・情報を求める問い」は、他者への問いとなり、「対話」に導くが、次には「対話」が「問い」を生み出す。問いと対話は循環を継続しつつ、新たな地平を切りひらいていく。一方、「内省の問い」は「孤独と省察」を余儀なくする。自由な思索の時空の中で、自己に問い続け、そのプロセスをへて、本当の自分の思いを明らかにしいく。浮遊型思索とは「内省の問い」ともいえる。

浮遊型思索の時間とは、現象としては、沈黙・瞑想・孤独、場合によっては「書く」時間でもある。その時間帯には葛藤し、悩み、戸惑いが生起し、混沌が支配することもある。やがて、その時点での自分なりの考えや感想がまとまっていく、つまり「混沌から創発」に至る。こうして漂うように思考・感情が揺れ動き、思索が浮遊する時間を保障することによって、深い考察、多様な視野からの熟慮ができ、「納得できる自分の見解」をまとめることができるのである。

ボルノー、ブーバー等の見解に啓発されつつ、浮遊型思索の要諦を次に収斂してみた。

- 思いに浸り、思いを巡らす時間、漂う不安感と精神的自由の享受。
- 自己の内部にあるものを掘り起こし、心に生じることを明確にしていく時間。
- 他者が伝えてくる多様なものを受け止め、組み合わせたり、また統合したりして、消化し、自分のものにし、自己見解を再組織する時間。
- 身体感覚・五感を通して得たものを言語化する時間、身体性や実感を伴わないことばは、

意味は通じても説得力をもたない。

・　うまく言語化できないものを見守り、新しい言葉が生まれてくるのを待つ時間。

・　微かな、わずかな表現から他者の伝えたいことについて　感じ取り、推察する時間。

・　早発への強制を脱し、混沌・混迷をへて、納得できる自己見解の創発に向かう時間。

・　悩み、戸惑い、不安になる、そうした心理的揺らぎを、むしろ楽しむ時間。

浮遊型思索の時間には、幅がある。ほんの短い時間から、長い時間まで、思索を練る目的や事象により、さまざまな時間帯があろう。

（2）　浮遊型思索の理論的背景

自己再組織化論、創作活動の基盤、創造力の要素の３点から、対話における浮遊型思索の有用性を検討してみる。まずは自己組織化論を取り上げてみよう。

次の文章は、複雑系の科学を基調におく科学研究の立場から「自己組織化とは何か」について分かりやすく説明している。「自己組織化とはランダム＝でたらめから、秩序＝整然とした状態へと自分で組み上がっていく現象である。すべての創作活動、コミュニケーションは、まず思索からはじまるが、この思索も、その本質は神経活動の集合に他ならない。思索というきわめて高度な生命活動は、いわば一人の人間の中で神経活動という自己組織化現象がいきつく終点ともいえる」(10)

複雑系の科学では、多様なものが混じり合うカオス「混沌」状況から、やがて新たな状況が生起する、複数の要素が組み合わされることで、要素一つ一つがもっていた性質からは予想もできない新しい性質が生じる「創発」と捉えている。

思考の流れの中で、最初の自分の見解を修正し、他者の意見のよさを加味し意見をまとめていく。浮遊型思索の時間とは「自己再組織化」の時間とも言えよう。

次に、創作活動を考察してみよう。音楽家武満徹は創作について、「作曲するに際して（私が）捜しもとめるのは、物象を規定し限定するだけのものではない創造力の容器としての『ことば』と謂うようなものです。それは私の思考の過程に震動（ヴァイブレーション）をあたえ喚起的に作用し、目に見えない直観や思考の縁（へり）を明瞭（あきらか）にします」と記している(11)。このことは、創作活動における浮遊型思索の時間の必要を明示していると受け止めることができるのではなかろうか。

人は、さまざまな事象との遭遇により、衝撃をうけたり、感動したり、考え込んだり、悩んだり、歓びがこみ上げてきたりする。それらが内面で渦巻き、震動し、やがてそうしたものが、吸い寄せられるように集約し、ある「ことば」になってくる。それらのことばが、組み合わされ、積み重なり意味を形成する。「ことば」によって形成された意志や感情等が、自己の外部に向かうとき、認識・思考、伝達・表現、蓄積・記録、虚構（創造）などの言語表現機能により、自己の内面に問いかけ、本当の自分が表現したかったものを創作していく。自己の内面から外へ表出（創作）するものをつなぎ・橋渡しするものが「ことば」であり、それを生み出す「と

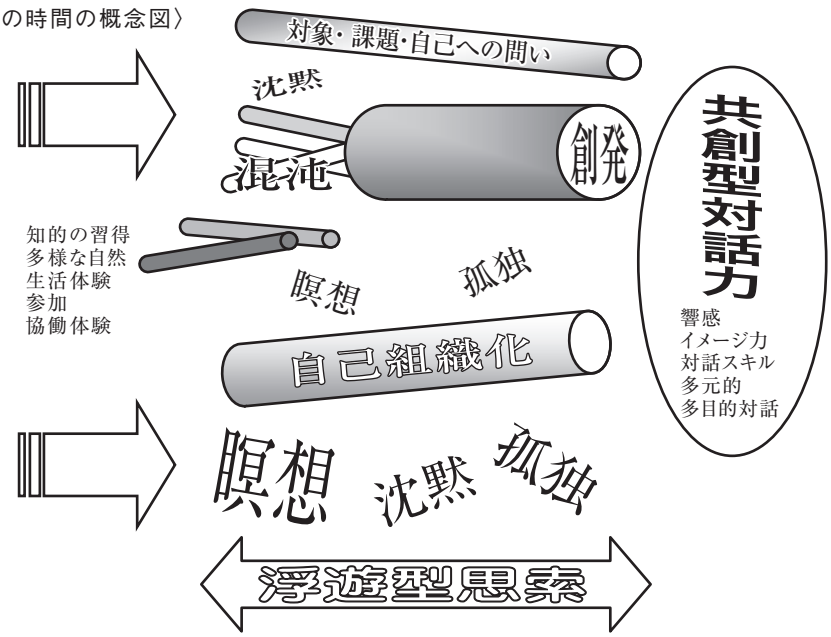
き」が浮遊型思索の時間といえよう。

最後に、創作（創造）の源ともなっている創作（創造）を生起させる要素について考察してみる。創造に向け、これらを組み合わせ、統合していく知的作業は即時的にはできない。「創造過程で重要なのは、孵化作用と啓示（ひらめき）の位相である。現時点では、この孵化作用によって、人は意識しないうちにある安定した構造を求めて、素材や要素を整合的に統合し、体制化を進行させ、また『啓示』によって、具体化され頭の中につくりあげた整合的な表象が、認識対象になりうる」のであり[12]、それを可能にするのは、浮遊型思索の時間と位置づけることができる。

先端の科学技術を駆使し、「新しい知」の希求している日本科学未来館では、創造力を構成する要素を分類しているが、創造力とは分析する参考となる。それらは、「むすびつける（Associative Creativity）」（一見無関係に見えるモノの間に、共通の性質を見つけ、これを「むすびつける」ことで、新しいものを生み出す力）、「くみあわせる（Integrative Creativity）」（ひとつの目的のために、性質の異なるものを調和させながら「くみあわせる」ことで、新しいものを生み出す力）、「ひらめく（Alternative Creativity）」（伝統的な価値観にとらわれず、これまでとは違う発想で、新しいものをつくり出す力）「みならう（Mimicing Creativity）」（あるものの機能や形からヒントを得て、これまでになかったものをつくる、あるいはできなかったことを成しとげる）、「きりかえる（Serendipity）」（予期せぬものから、価値あるものを見出す力）、の５点である。

これまでの論述を集約した浮遊型思索の時間の概念図を提示する。

〈浮遊型思索の時間の概念図〉

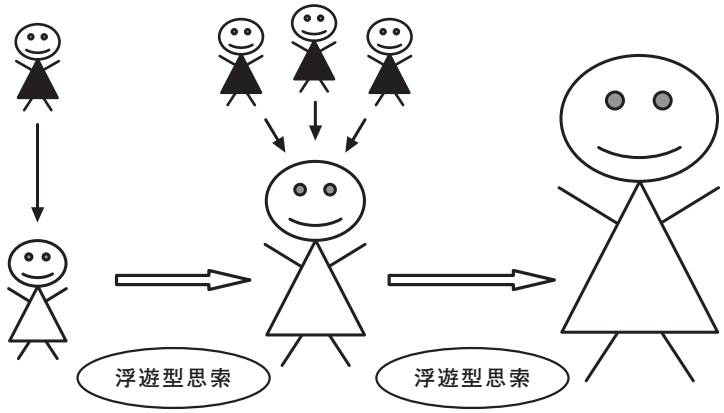


（3） 人間の成長の場と浮遊型思索

人は他者との関わりによって成長する動物である。他者と出会い、さまざまな刺戟を受け、戸惑い、思いまどい、また協働・共創する体験の継続により、自己成長していく。極北のアラスカで、そこに棲む人々と動物たちを写し続けた動物写真家星野道夫の次の文は、人間の成長と他者とのかかわりの意味を明示している。「人と人とが出会うということは、限りない不思議さを秘めている。あの時あの人に出会わなかったら、と人生をさかのぼってゆけば、合わせ鏡に映った自分の姿を見るように、限りなく無数の偶然が続いていくだけである。が、その偶然を一笑に伏するか、何か意味を見出だすかで、世界は大きく違って見えてくる」(13)。

他者との出会い、関わりにより人間が自分を成長させていくことを図に表してみた。

〈人間成長と出会い〉



（4） 沈黙、孤独、瞑想

浮遊型思索の時間としての沈黙と孤独について考察を加えておく。沈黙とは、壮大な干渉されない、無為の時間であり、自己の感慨や思考に夢中になれる時間である。スイスの思想家マックス・ピカード（Max Picard）は沈黙の意味について、「沈黙は単に人間が語るのを止めることによって成り立つのではない。単なる『言語の断念』以上のものである」「沈黙はその人間の中心なのである。人間のうごきは、ひとりの人間から直接に他の人間にはたらきかけるのではなく、ひとりの人間の沈黙から他の人間の沈黙に働きかけるのである」と述べ、また「人間の眼差しそれが包括的なるところの内在的な原動力である」とも記している(14)。

沈黙の時間それは「要約→自己再組織化→表出」に至る時間となる。たとえば対話における沈黙は、相手の意見を咀嚼し、さまざまな情報を集約し、それらを念頭におきつつ自分の見解を再組織する時間となる。沈黙は無為の時間ではなく、高みに至るための活力を培うための温床でもある。

さまざまな体験の中でも「孤独」になる体験は得難いものだ。孤独体験は人間としての幅を

広げ、しなやかでしかも逞しい人格をつくる。その人は人生の歩みの中でどのような育ち方、人との出会い、体験をしてきたかが人格に表れるものである。

孤独になること、それは、自分を見つめ直し、自分と対話することにより、「納得できる自分の生き方」を見出す時空を得ることである。また、孤独は周辺にいてくれる人、そして遠くから自分を支えてくれる人の存在の大きさを感知する機会ともなるからである。

孤独に耐え、自己の選択と責任において人生を創造していくのは、難しいことである。しかし、痛いほどの辛さ　そこを突き抜けると、不思議な安らぎが感得できる。だからこそ、こうした孤独を噛み締めた人の言動からは、えも言われぬ温かさと強靭さが感得できるものである。孤独は本当のやさしさを生起させる(15)。

沈黙や孤独を成長に結びつける時間、それは自由に思いを巡らすことを保証された浮遊型思索の時間なのある。

ここで浮遊型思索における知識・情報の大切さについて付言しておく。人が思いを巡らすとき、その有用なよりどころとなるのが、知識・情報である。たとえば、現代の事象の本質を問うとき、歴史的事実についての知識がヒントを与えてくれる。また、翻訳をする際、作者の意図をくみ取った適訳を模索しているとき、さまざまな知識や情報が道をひらいてくれる。そうした意味で、読書や対話などを通して、多様な知識・情報をもっていることは、浮遊型思索を充実させることにつながると考える。

2010年秋、「21世紀の智と実践」フォーラムに参加した。3日にわたったこの企画では、「心をみつめ、こころをみがく」をテーマに「瞑想」について、アジア地域の真摯な宗教者、日本の宗教学者、科学者、心理学者などが参集し、講演・シンポジュウム、瞑想の実習体験が行われた(16)。講演から「瞑想」のもたらす奥深い意味を考えさせられ、呼吸法や発声、身体動作等の実習体験から「心の働きが静まること」「心の悩みや感情が克服できる」効果を感得した。

筆者の「瞑想」についての知見・体験はあまりに浅学、未熟である。本稿では「瞑想」のもたらす効果が浮遊型思索にも生かせることを指摘するのにとどめたい。今後、「瞑想」についてさらに研鑽し、考察を深め、体験をなし、浮遊型思索の成果を高めるための瞑想活用の在り方を明らかにしていきたい。

3　響感・イメージ力

「響感・イメージ力」を育成するとは、人間の持つ根源的な感性を豊かにすることである。相手の伝えたいことを感じ取り、真意を洞察し、相手の立場や心情をイメージする力である。自己中心の思考や感覚に固執するのではなく、人間同士として共感したり、相手の立場に立って考え、感じたりする力である。「ことばの背景にある、伝えたくてもことばにできないもの」、「微妙な身体動作に示されたもの」などに対する感覚を鋭敏にしておくこと、殊に、つらい立

場、厳しい状況を推察しようとする姿勢をもつことによってこそ、相手が本当に伝えたいことを受け止めることができる。

響き感じる、イメージを広げる、こうした行為が知的興味を広げ、人への関心も高めていく。感性を鋭敏にし、未知なるものへの興味・関心を広げていくことが、浮遊型思索を豊穣なものにし、共創型対話を充実させていく。

「響感・イメージ力」は文化・価値観などの異なる他者との対話では特に重要である。一つの環境との関係樹立に有効に機能したある文化も、他の環境とは逆に摩擦の原因にさえなり得る。同じ言語を使っているからといって理解しあえると安易に考えてはならない。むしろ、常に自分の発信内容と相手の返答内容を点検する感受性の鋭さが求められる。

（1） 伝え合いから、通じ合い、響き合い、創り合いへ

対話とは、単に伝え合うだけでなく、通じ合い、さらに響き合い、創り合う活動である。

単に自説を述べるだけでなく、お互いに相手がそれなりに納得できる、理解できる、すなわち「通じ合える」ためには、自他共に相手の伝えたいことを感じ取る真摯な努力が必要である。相手の立場や文化的背景について、推察し、イメージすることにより、完全な理解や合意形成ができなくても、相手の思いに響感することはできる。この響き合いをお互いに感得できるとき、人間同士としての親和感、信頼感が育まれていく。

（鋭敏さ）とは、「何かが起きていることを感じ取る能力だ。自分の反応の仕方や他人の反応の仕方を察知し、ごくわずかな相違点や類似点に気づくことである」。その「鋭敏さの障害となっているものは、自分の想定や意見を守ろうとする行為」である[17]。

響き合える人に対すると、人は心を開き、語る。そうした語り合いの中から、新たな解決策や知恵を共に創る対話が生起してくる。このことを筆者は、さまざまな人々との対話体験から確信している。そうした対話力は人々に勇気を与える。人は悲しみに打ちひしがれているとき、絶望の淵に立ったとき、たとえ、たった一人とでもつながっていると感じたとき、生きる勇気をもつことができる。そのつながりをもたらすのは、響感・イメージ力なのである。

（2） 対話における響感・イメージ力の効果

高校生が国際交流体験で感じ・考えたことを資料に[18]、対話における響感・イメージ力の効果について考察してみる。奈良女子大学附属中等学校教諭の南美佐江は「中等教育における国際交流事業の意義と効果を生徒の視点から検証し、そこで育むべき、グローバル時代に対応できるコミュニケーション能力とは何か、『心の響きあう』コミュニケーションを呼び戻すために学校教育の中で何ができるのか」を研究課題とし、そのヒントを得るため、世界各国の若者との国際会議に参加し、いまは大学生・大学院生・社会人となっている生徒達にインタビューし、それを文章化した。修士論文の相談相手であった筆者は、インタビューの記録を読み、響感・イメージ力の効果を確認した。下記は、膨大な記録からの南が注目した内容の抜粋である。

・　先生の支えに勇気づけられた。
・　ことばを横においたツールが効果を高める必要を感じた。
・　ことばのハードルを大きくしない。
・　しゃべりたいものをもっている自分に気がついた。思った以上に語る自分に驚いた。
・　ここでしゃべると、論議がとまるのではないかと悩んだ。（コーディネーター役）
・　熱い思いは対話への意欲を高める。しかし継続するのは対話の楽しさの実感
・　大学に入ったが、授業が講義ばかりでおもしろくない。
・　結論を先に言うような伝える工夫の必要　説明の仕方の習得が必要だ。
・　根本的にものごとを深く考え始めた。人としゃべって気づくことがたくさんあった
・　自分でも気づかずに語り始めた自分を発見した。
・　相手に悪気があったのではなく、違いを伝えようとしていたと気がついた。
・　違った考えや文化をもつ人々と対話する楽しさを実感した。

この抜粋された記録文の中から、教師の役割、論議技法習得の必要性、対話の快感などが発見できる。特に注目されるのは、響感・イメージ力の効果の感得である。他者の思いへの気づき、自己への気づきが散見できる。南は、いつもは活発に発言する子が「ここでしゃべると、論議がとまるのではないかと悩んだ」と、コーディネーターとしての役割を自覚し、自己発言をおさえ、グループの発言を活性化するための配慮をしたことにこの生徒の成長を感じたという。響感・イメージ力のもたらす、そこはかとない他者への心遣いが一人一人に対話の快感を感得させ、対話の内容も充実させていくのである。

（3）　響感・イメージ力を高める

いかにしたら「響感・イメージ力」を高めることができるか、見解を述べてみよう。

ｉ　「揺さぶり」体験

知人の教師が送ってくれた次のメール文（抜粋）は、響感・イメージ力の育成における体験の重要性を示している。

私は、小学校・中学校と自分自身への自信のなさから、人とコミュニケーションをとるのが上手な子ではありませんでした。よくあるグループ作り、大嫌いでした。上手に声をかけあってグルーピングしていく友達を尻目に何もできず、いつでも最後に残ってしまうのが惨めで、保健室に逃げていました。また、授業中「次の文章、読んで。」と言われると緊張で手足がくがく、声まで震えだすのです。常に自分に指名がまわってこないよう、祈るように通っていた学校生活でした。

その後、いろいろな出会いや出来事があり、教師となりました。すると、クラスに必ずかつての自分自身を見つけます。胸が締め付けられるような気持ちになります。自分なりの感覚で

そういう子に寄り添い、ちょっとした機会をとらえ自信をつけていってもらってきたように思います。かつて自分に自信を持つことができなかった屈辱感は、今では自分の大切な宝物で、持ち味だとも思っています。

子ども時代の体験が、教師として、子どもの心情を推察し、子どもの心に響く寄り添い方のできる原点となっているのである。

体験は、響感・イメージ力を高める有用な活動である。しかし、体験はさせれば効果があがるというのは錯覚である。子どもたちの実感・納得・本音は、ときとして一面的、浅い認識、自己中心的となりやすい。こうした一人よがりの実感・思考・本音自体を変えていき、新たな世界を発見する喜びを感得させるためには、頭のなかの勉強だけでは到底無理である。「心の底から揺さ振られるような体験」が不可欠である。それは感動体験、成就体験、挫折・失敗体験、矛盾体験、不合理体験、異文化理解体験、協働体験などである。強烈なインパクトがある体験が、固定観念や、既成観がひっくり返すことが多々ある。

直接体験の有効性は「現場性と身体性」にある。私たちは、現場に行くことによって、事実を深く認識できたり、問題の本質に気づかされたりする。身体全体で感得できたことが人間の行動のエネルギーとなり、生き物としての人間の活動を活性化させる。五感で感得したことが、おもしろさとなり、やがて、知ろう、考えようとする意欲につながっていくのである。

人とふれ合う、事象に出合う、土や水、木々や小動物等に直接ふれる。こうした現場性と身体性による体験活動が、感覚を研ぎ澄まし、イメージ力を高めていく。

ii　表現・鑑賞活動

表現体験は、響感・イメージ力を高める有効な手だてである。このために筆者はさまざまな活動（「私・学生・人生」などの単語からイメージしたことを絵で描く絵文字作成、事象を自分のことばで説明する私の言語辞典、心象の詩作等）を創ってきた。その一例を示す。下記は３つの目的、①自分の辛いこと、やめたいこと、落ち込んでいること、②ともだちを励ます。③自分を励ます、短歌づくりである。学生の作品を例示する。

①　にぎりしめ　棘がくいこみ　なげつけた　手の平に残る　後悔の跡
②「手を出して」 そこに重ねる　私の手　あなたの傷を　私にも
③「ごめんなさい」 その一言が　第一歩　ふるえる足で　踏みだしていけ
①　階段の　あと一段が　上がれない　ピーターパンよ　私をさらって
②　泣かないで　世界で一番　美しい　あなたの心を　救ってあげて
③　パパとママ　おじいちゃんに　おばあちゃん　お姉ちゃんも　そう、一人じゃない

短歌そのものの出来はともかくも、自分や他者の心情を思い浮かべ、作品に仕上げる過程で、

感じる心や推察する力が、少しずつ高まっていくと期待した。

表現の前提として「観察」が不可欠である。「日常何気なく見過ごすことに、気づかないでいたことを発見した」等のテーマで文章を書かせ、また、一輪の花を多様な角度から観察し記し、あるいはそこから想起するイメージを書かせることも行った。こうした訓練は響感・イメージ力を高める契機となると確信する。鶴見・服部の次の対話は創作することと響感・イメージ力との関わりを明確に示している。

鶴見　佐佐木幸綱さんが、「歌はリズムではない、響きである」、そういうことをはっきりおっしゃっている。歌の響き説というのを出していらっしゃるんです。確かに響きです。

服部　それが新しい生命を引き出す。

鶴見　生命と同じ。生命の響きなの。

服部　ですからそれが歌になって泉のように湧いてくると思ったんです[19]。

鑑賞もまた、響感・イメージ力を高める。下記は、読書と脳の発達の関連を論じたメアリー・ウルフの名著『プルーストとイカ』の抜粋である。

- 読み聞かせや朗読を聞き、また読書に親しんだ子どもは、やがて、その機会が少ない子に比して、高度な対話力・文章表現力をもつようになる。
- 読む行為は、他人を理解する力を養い、他人の考え方を受け入れる能力の基礎を形成していく。また、物語の展開を読む体験を継続していくと推論力が高まってくる。
- 読む行為は、思考・感情などを司る脳の機能そのものを進歩・発展させていく。

読書は、知的世界を広げ、多様な見方、考え方の存在知らせ、また人の心の機微を感得させる。観劇、絵画、映画、テレビ、民族舞踊等の優れた演技や作品の鑑賞も同様である。

いわば人間としての広義な教養を身につけることが、響感・イメージ力を高める。

（6）「響感・イメージ力を高める」ための導き

ここで、「響感・イメージ力を高める」ための「導き」の必要を指摘しておきたい。さまざまな、心にくさびを打ち込む体験、心を揺るがす体験、価値ある体験などにより、青少年は「響感・イメージ力」を高めていけるかもしれない。しかし、青少年の現状を直視するとき、「説明・対話・師範などを通しての先達による「導き」の必要を痛感する。

その理由のひとつは、青少年の生活の中での、他者との関わりの希薄化にある。例えば、教育研究開発センターによる「第２回、子ども生活実態基本調査」によると、友だち関係について、「仲間はずれにされないように話を合わせる」、小学校51.6％、中学生44.4％、高校生41.1％、また「グループの仲間同士で固まっていたい」小学校52.5％、中学生50.9％、高校生43.8％との回答となっている。この結果からは、「人の目」を過剰に意識し、本音を出し合わない、皮相的な人間関係の蔓延が推察できる[20]。

第二の理由は、体験の欠如である。子どもたちから自然体験・社会体験の機会が激減してい

ることも周知の事実である。例えば、2009年の青少年白書は、特集「家庭・地域の変容と子どもへの影響」において、「情報メディアへの接触の長さ」の一方、「遊ぶ場所、仲間、時間の不足」を報告している[21]。

家庭・地域の教育力の低下もあって、人間関係に苦手意識を持ち、バーチャルな世界への依存度が高い、青少年が増加している。こうした青少年には、単に体験をさせるだけではなく、体験の目的や意義を説明する、体験から感得できたことについて仲間と対話し、確認し広げる、あるいは教師や親が体験から得た視野の広がりやものの見方の深まり、感動などを語ったり、例えば、朗読・詩作、辛い立場の人へのそこはかとない支援をするなど、実際の行動で示したりする「師範」が必要である。

こうした「導き」により、青少年は、物事の本質を見通したり、多様な視点のあることに気がついたり、他者の些細な行為の底にある、気高い思いを感得できたりするようになる。そうした「導き」が、「響感・イメージ力」という、人間の至高の精神的活動を高めていくのである。

おわりに

21世紀の人間形成に大きな役割を担う共創型対話、またその共創型対話を充実させる、浮遊型思索、響感・イメージ力について考察してきた。本稿を書き終えるいま、今後検討すべ課題が数多くあることに気づかされる。ことに重要な課題は「時」の検討である。

文化の相違と行動との関連を研究した、エドワード・T・ホールは「時は、ものをいうことができる。言葉よりさらに明瞭に話す」「ことばが虚偽を語る際にも、時だけは真実をあらわにする」と記し、数多くの事例を調査しつつ、文化の差異による「時の観念」の違いを例示している[22]。

片倉もとこは、イスラムのゆたかな時間「ラーハ、ゆとろぎ」を紹介し、それは「ゆったり散歩するとか、瞑想にふける、お祈りをする、人と話す」時間であると記している[23]。アラブ世界で生活した体験をもつ筆者は、当地の人々の、水パイプをゆったりと楽しみ、また砂漠で満天の星をみつつ、詩作にふけるなど、静かに流れる時間に身をまかせるようすを想起し、現代の日本人との「時の観念」の違いを実感した。

直塚玲子は、「相手との対立をさけ、相手の顔を立てながら、こちらの気持ちをほのめかす婉曲表現『相手の存在の重要さを、たえず意識していますよ」という気持ちを表す挨拶、ためらいがちな相手の意見や感情を引き出す会話の間、これらはすべて相手の感情を傷つけないようにという日本人的配慮からでているのである。したがって、そのために費やす時間は、高利回りの投資であって、時間の浪費なとは、とんでもないお門違いの批評である」と記し[24]、会話の間を例に日本人の独自の「時」の活用を指摘している。

加藤周一が「世界観は文化によって異なる。すなわち時間と空間に対する態度、そのイメー

ジや概念は、文化の差を超えて普遍的なものではなく、それぞれの文化に固有の型をもつにちがいない」と記しているように[25]、「時の観念」は、人々の文化により異なり、それが思惟方式・行動様式にも影響を与えている。

こうした文化の相違による「時の観念」の多様性を検討することにより、多文化共生社会に対応した共創型対話力を充実させる、浮遊型思索や響感・イメージ力の意義についてさらに深い考察ができると考える。今後の研究課題としたい。

【注記】

（1）　多田孝志,『共に創る対話力』, 教育出版, 2009年, ３～４頁
（2）　澤柳政太郎,『教育読本』, 第一書房, 1937年, 172～173頁
（3）　倉澤榮吉,『國語教育概説』, 岩崎書店, 1950年, 53頁
（4）　唐沢富太郎,『現代に生きる教育の叡智』, 東洋館出版社, 1959年, 159頁
（5）　Ｏ．Ｆボルノー　森田孝・大塚恵一訳,『問いへの教育』, 川島書店, 2001年, 190～191頁
（6）　吉田敦彦,『ブーバーの対話論とホリスティック教育』, 勁草書房, 2007年, 64頁
（7）　同上書　67頁
（8）　ジャン＝フランソワ・ルヴェル・マチウ・リカール著　菊地昌実・高砂伸邦・高橋百代（訳),『僧侶と哲学者―チベット仏教をめぐる対話』, 新評論, 2008年, 321頁
（9）　多田孝志,『対話力を高める』, 教育出版, 2006年, 45頁
(10)　都甲潔・江崎秀・林健司,『自己組織化とは何か』, 講談社, 1999年, 77頁
(11)　武満徹,『音・ことば・人間』, 岩波書店 , 1980, 239～240頁
(12)　内田伸子,『想像力』, 講談社, 1994年, 229頁
(13)　星野道夫,『アフリカ旅日記』, メディアファクトリー, 1999年, 106頁
(14)　佐野利勝訳,『沈黙の世界』, みすず書房, 1993年, ７頁
(15)　多田孝志,『地球時代に言語表現』, 東洋館出版, 2003年, 37～38頁
(16)　主催「21世紀の智と実践フォーラム」, 西大寺, 元興寺　共同企画
　木村清孝　蓑輪顕量　堀内宗完　佐伯俊源　吉田敦彦　熊野宏昭　辻村泰善　ロバートローズ　石田太一　北山喜代　井上ウィマイラ　台湾・タイ・ミャンマーからの宗教者が参加した。
(17)　デヴィッド・ボーム　金井真弓（訳),『ダイアローグ』, 英治出版, 2007年, 103頁
(18)　南美佐江,「国際交流事業で育むグローバル・コミュニケーション能力―奈良女子大学附属中等教育学校の実践から―」, 2010年
(19)　服部英二・鶴見和子,『「対話」の文化　言語・宗教・文明』, 年, 90頁
(20)　教育研究開発センター,『第２回子どもの生活実態基本調査』, 2009年, ９頁
(21)　内閣府,『平成21年度青少年白書』「特集　家庭、家庭に変容と子どもへの影響」, 2009年, 19～20頁
(22)　エドワード・ホール著　國弘正雄　長井善見　斉藤美津子（訳),『沈黙のことば』, 南雲堂, 2006年, 15頁
(23)　片倉ともこ,『ゆとろぎ　イスラームのゆたかな時間』, 岩波書店, 2008年, 10頁
(24)　直塚玲子,『欧米人が沈黙するとき』, 大修館書店, 2002年, 222～223頁
(25)　加藤周一,『日本文化における時間と空間』, 岩波書店, 2007年, ４頁